Shimmura, Izuru
Kokugogaku Kokugo keito ron

国語学

国語系統論

新村出

國語科學講座

—Ⅲ—

國語學

國語系統論

新村出

株式會社
明治書院

國語科學講座

—IV—

國語學

國語系統論

新村出

株式會社
明治書院

目次

國語系統論

新村　出

一　序

日本語と他の言語との比較研究は、西洋では十七世紀の頃から行はれてゐる。尤もそれが學問的に行はれるやうになつたのは十九世紀のはじめ頃からである。それまでは單に思ひつきの程度で行はれてゐたにすぎない。しかし何れにせよ、西洋の人々の注意を惹いたのは新しいことではなく、學問的興味の對照となつてからでも百年の年月は流れてゐる。

吾國においても朝鮮語との比較研究(例へば白石の東雅の如き)は徳川時代から學者の注意を惹いてはゐたが、それが眞の學問的研究になつて來たのは漸く明治二三十年の交からにすぎない。

この間の學者の努力は西洋においても、日本にあつても決して少ないものではない。それにも拘らず日本語の系統的位置はいまだに最後的の決定を見てゐないのである。愼重な言語系統論においては、今日もなほ日本語は孤立の位置におかれてゐる。最近西洋では相當の權威を持たせてもよいと思はれる系統論の大きい本が二種出たが(シュミット

師の「世界の語族と言語圏」ハイデルベルヒ、一九二六、及びメイエ・コーアン兩氏監修の「世界の言語」パリ、一九二四。今一つ出てゐるのにキーッカースの「世界の語族」ハイデルベルヒ、一九三一、があるがこれは、少くとも日本語に關する部分ではシュミット師の紹介であつてここには問題にならない)、その何れにおいても日本語は畢竟他の言語に對する積極的な關係を認められてゐないのである。

その深い原因は何處にあるにもせよ、日本語の位置が未だ明らかでないといふ事實は、これに關する種々な——時には勝手な——試みを生むことになつて、世界中においても日本語程廣く他の言語に關係をつけられようとした言語は昔からなかつたと云つてもよい位である。

古いところはさて措き、近年になつてからも、日本語を西歐ピレネー山中に殘るバスク語と同系統なりと論じた天主教の僧侶があり、或は最古のバビロン地方に行はれたと考へられるスメリア語(シュメル語)と同一系統に屬するとの說が一時東西の學者に示唆されて人々の注意を惹いたこともあつた。有名な英國のセイスなどもその一人であつたのである。古くはケルト系のアイルランド語との系統關係を唱へた人もあつた。

吾國においても印度古代語との關係を主唱した人もあり、ギリシヤ語ペルシヤ語との關係、メキシコ語(インディアンの)との關係をつけようとする人々は今日も時々見られる有樣である。尤もこれらは元來同系といふことを如何なる關係と考へてゐられるのか、疑はしいものがある。

その他支那語との根本關係を主張した人々も德川末期からあり、明治を通じてその遺風は長く勢力を揮つてゐたやうである。これらの主張に對しては直に反駁があり反面の主張があり、容易に決しないやうであつたけれども、公平

に見れば肯定する側の人の多かつたのは事實である。專攻柄非常に偏した語彙の撰び方ではあつたが、松村任三博士の辭典などはそれであり、雜誌明星に暫らく連載された與謝野鐵幹氏の日本語の語源論の如きその例である。

言語の系統の決定は困難な問題である。言語の比較研究にあつても最も興味あり注意を惹くものであるだけ、問題の解決には困難な過程を踏まなければならぬ。元來甲の言語と乙の言語が同一系統に屬するといふのは、それぞれの言語の歷史を遡るとき、一つは或時點において同一の事態に合一するといふことである。言葉を換へて云へば、二つは元々一個の言語から分出したものであるといふことである。分出してからそれ〴〵の變化を重ねて來てゐるのであるから、甲と乙の言語要素を直接對照しただけでは或は全く似寄りがないかも分らない。變化を還元し、二つの間の「共通の原語」を通してはじめて關係がつけられるのである。從つて一見非常に異なる要素が遡つて同一に歸することもある如く、一見非常に似てゐるからと云つて直に關係があるとは斷言出來ない。却て反對の場合も多いのである。單語の借用關係ならば暫く措き、日本語の根本的系統關係をペルシヤ語、ヘブライ語、シュメル語、或は支那語に求めるとする試みには、この意味において、贊同し難いのである。甲乙を直接つき合せただけでは言語の系統を決定することは出來ない。しかるに第三の共通原語は、その理由は樣々ではあるが、推定再構するに比較的容易なこともあれば、非常に困難であることもある。日本語の系統論が種々の試みがあるにも拘らず、容易に進展しないのは、何れの方面に向つても、それとの共通原語推定定立が殆んど不可能なからである。

如何なる困難があるにもせよ、我々としては先づあまりに研究法に囚へられることなく、材料に負けず、既成の智識を利用して洞見的に事を進めてゆかなければならぬ。しかしながら系統論の原則は常に忘れることは出來ない。

この意味において、最近の試みの中で、殊に注目すべきは日本語を南方に系統づけようとする試みであるが、しかし今までの日本語系統論の中で古くから最も有力であるのみならず、相等積極的な結果を齎してゐるものは云ふまでもなくウラル・アルタイ語との關係論である。別に朝鮮語との關係も亦有力である。本講では無用の論議を省いてこれらの三つの議論だけを問題にする積りである。

〔もし日本語が南北の全く系統を異にする言語に對して動かすべからざる根本關係があるとすれば、日本語には二つ或は二つ以上の原語があつたことになる。「二つ以上の原語から」といふことは今まで言語學者も可能的には考へたことはあるけれども未だ一度も事實上は認められてゐない問題である。日本語においてこれが事實とすれば、日本語は全く新しい問題を比較言語學一般に對して供給することになる。當然新らしい研究方法が考へられなければならないが、私の想像するところでは實際かういふ事情には立ち至らないであらう。言語の「交錯」の結果は人種の交錯の結果とは別のものであるのが普通である。精々やはり一つの原語から出でたものであつて、他の要素はその中に解消吸收せられた如き關係ではあるまいかと思はれる。〕

なほ日本語を朝鮮語と共にアリューシャン語に關係をつけ、或はエスキモーの言語と同一系統なりと臆測したり、所謂極北民族の言語に結びつけんとする試みもあるけれども、私は今のところ全然これに賛同することが出來ないのである。

二　南方語との關係について

極く最近は、日本語と南方の諸言語との關係若しくは交渉を論ずることは一時に比べて隨分下火になつたやうであ

るが、我國においてこの問題が段々取り扱はれるやうになつたのは明治二十年頃からであらう。大正九年には私も臺灣のアミ族（アミス族）の言語（南島語族卽ち古くインドネシア語族と稱せられた一群の言語の一つ）を採集報告したもの丶中に、比較的日本語に類似したものが多い事に注意して、多少この問題を論じた事があつた。例へば、

星を　ボイス

畑・原を　パラ

といふ如き如何にも類似してゐる。これに、我國語のP音論を考へに入れるならば、似寄りは妙とでもいふべき程である。尤も、パラはまた臀部をも意味するのであるが、これは日本語の腹に引き當てて考へて考へられないことはない（位置は前後相反するけれども）、アミスでは腹はビリであるから。また、

葉を　パパ

といふのも南洋語に同音重復が多い事實（Renward Brandstetter, Die Reduplikationen in den ...indonesischen ...Sprachen. 一九一七）と日本語のP音論を考へるならば、如何にも巧妙な一致と稱せざるを得ない。鯨をイソヲといふに至つては驚くばかりである。そのほか私はなほ數個の例をあげたのであつたが、私は決してこれによつて、日本語が南洋語と根本關係がある――卽ち一個共通の原語から分出したものである――ことを證明しようとしたのではなかつた。根本關係は前の節に述べた如く、豫想せられる第三語を通じての對應によつてはじめて證明し得られるものであり、從つて何よりもそれぞの言語史を明らかにせなければならないに拘らず、文獻のないこの南方の言語は昨今の採集簿がはじめての文獻である。言語史は到底現代を出でることは出來ない。言語の比較を價値あらしめるた

めには、かくの如く歴史を無視すること程危険なことはないからである。のみならずその單語の數は大きい問題を前にしてはあまりに僅少である。といつて私は根本關係の可能性——少なくとも取扱つた單語に關しては——を全く否定し去つた譯ではない。分らない語史の裏には何があつたか分らないからである、たゞ私はこれによつてこゝに何らかの可能性の閃く事を注意したゞけであつた。

或は單なる偶然の一致であつたかも分らない、或は單なる偶然の似寄りであつたかも分らない。

或は所謂借用關係にある單語かも分らない、卽ち今の場合、日本語に及ぼされた南方語の外來語的影響の名殘かも分らない。太古からの相互の交通は充分に可能性がある。

南方語に關係がつけられたとき、その關係なるものが、如何なる性質のものであるかを決定することの出來ないのが、日本語の南方關係論における根本的の弱點なのである。要するに問題はこれだけである。

その關係づけられる單語の數が相當に多く、しかもその關係そのものに一定の原理が立て得られるとき、卽ち一定の對應の規則性が認められるとき、それらが少くとも單なる偶然に出づるものでないことだけは肯定せなければならぬ。最近東西の學者によつて、特に慶應の松本信廣氏によつて(N.Matsumoto, Le japonais et les langues austro-asiatiques. Paris. 1928)、語彙における一致が方法論的に例證せられるやうになつた。その數も亦決して少しとはせられないのである。しかし今までのところ單に語彙の一致であつて、文法の體系のそれに及んでは居らない。この一致が認められない限り我々としては言語の根本關係を論ずることは出來ぬ。如何に日本語の語彙が替つても文法が日本語のそれであつたなら、それは依然として日本語である。言語の根本關係には必ず文法體系の一致がなければなら

ぬ、單に語彙の一致だけでは、それが余程特殊な場合でない限り、以て根本關係を論ずることは出來ないのである。——松本氏が最もよき材料を持ち、殆んど根本關係の可能を信ぜんとせられ（九六頁）ながら（一一三項の單語對照及び音韻對應の規則等）、單に借用關係、或は影響關係に議論を止めんとしてゐられるのも當然の事ではあるが、また正しい態度とも云はなければならぬ。私が曾て大隅風土記逸文中の必志（ヒシ——ピシ）を南洋語 Pĕsar 等に引き當てた時もやはりこの意味以上を要求したのではなかつた。〔坪井九馬三氏の所論には遉がに我々を啓發するものも多いのは事實ながら、全體として行論には遽に贊することが出來ないのはまた已むを得ないのである。〕

尤も文法體系の一部について試みをしたものもある。先年東京に來てゐたこともある和蘭人ファン・ヒンローペン・ラベルトン V. Hinlopen Labberton 氏であるが（一九二三年濠洲に開催された汎太平洋會議におけるその講演「日本語とマレーポリネシア語との根本關係に關する考察」、及び一九二五年の日本亞細亞協會紀要第二輯第二卷におけるその "The Oceanic language and the Nipponese as branches of the Nippon-Malay-Polynesian family of speech"）、それも殆んど語構成法だけであつて、例へば「マレーポリネシア語に多い」挿入辭（infix）を日本語に認めることによつて、卽ち furu（降る）に -ur- を挿入して fururu（觸る）、更に -in- が入つて f-in-ureru>nureru（濡れる）となるとするのであつて「濡れる」は「降る」よりかくの如くして構成さると云ふのであるが、事實これでよいものであらうか、我々としては疑なきを得ない。のみならず南島語に多い音韻錯置（metathesis）の現象を日本語に當はめて、例へばマナイタ（俎）のマナ mana- はナマ nama-（生・腥）の錯置であり、ナマは腥いもの卽ち魚であるから、マナイタは魚を調理する板卽ナマイタに外ならないとするに至つては、少々手品のやうにも思はれる。しかも一貫的にこれ

を以て日本語の語彙を廣く說明してはゐないのである。器用ではあるが信ずることが出來ない。從つてこれによつて「ニッポン・マレーポリネシア語族」を構成せんとする氏の試みには直に賛することが出來ない。しかし氏の說を全部否定しようといふのではない。元來明晰でない日南關係において、どうして互に他を決定的に否定し去ることが出來よう。のみならず氏の說には少からざる示唆がある。ただ證明力が弱いといふのである。

現代の研究の狀態において日南の言語關係が如何なる性質のものと考へられてゐるかは、大體以上の敍述で判然さるゝことゝ思ふ。外人の研究にはその外、古くはベルツ、新しくはホワイマントの如きがあるけれども別に論ずるにも足るまい。殊にオノマトペアの對照に比較の基礎を置かうとする人もあつたが、最危險なことは云ふまでもない。今までのところ、松本氏の研究が最も正しく行はれてゐるであらう。語根の立て方その他細部については異論がないでもないが、氏の考はやはり溫健としなければならぬ。

「國語に及ぼせる南方語(殊にミクロネシア語)の影響」を論ぜられた松岡靜雄氏(國語・國文第四卷二號)も、行論は必ずしもすべてにおいて我々の賛同を得ることは困難であらうけれども、やはり「比較の結果によれば、國語は南方語とは同一系統ではないが、それから多大の影響を受けたことは否むべからざる事實」であると結論してゐられるのである。

附記一、本項において南方語と云つたのは、シュミット師の所謂南方語の意味であつて、範圍においては大體プシルスキー氏(從つて松本氏)の所謂南アジア語族にあたる。卽ち南島語族(マレーポリネシア語族)の諸語の外、南東アジア一帶の言語を含めてゐるのである。シュミット師とプシルスキー氏は命名の態度に相違はあるけれど

も、範域においては殆んど變りはない。

附記二、松本氏の比較せられた語彙は非常に興味深いものであり、また示唆に富むものであることは右にも述べたとほりである。私もそれを見ながら私として考へたことの二三はないのではないが、今は時間が迫つてゐるので、氏が語彙の第一番にかゝげられたテ(手)の項についてだけ一言を許されたい。氏はテを南方語に關係を求めつゝ(その關係性の究極の當否は姑く措き)、一方においてテは日本語内でツカ=ムに關係するものとして別にその說明をしてゐられるのであるが、私としてはテは端的にト=ルに關係させたい。かうせられた方が少くとも音韻方面の說明は簡單であり一貫的であらう。――テの概念がトル(又はツカム)の概念に關係することについては或は疑問があるかも分らないが、しかしこの關係は獨り日本語に限られたことではなく、ギリシヤ語の kheir (手)、ラテン語の (h)ir「手」、などは梵語の harati「彼は取る」に含まれてゐる根の g'her- から出來てゐるのである。メ(目)―ミ=ル(見)、テ(手)―ト=ル。

附記三、語彙の借用關係が非常に古い時代に行はれるときは後世から見て、語の外來と本來の區別がつかなくなるものである。フイン系統の諸語に印歐語系統の單語と共通のものが數多く見出されるとて一時兩系統の同系が唱へられたことがあつた。ヘンリ・スキートなどもこの點では頗る輕率であつたと云はなければならぬ。しかしそれが丁抹の碩學トムセンの劃期的な研究などによつて(殊に一八九〇年の Beröringer mellem de finske og de baltiske sprog. その一五四頁―一五五頁參照)、次第に明らかにされて以來、問題の取扱方も次第に愼重になつて來た。日南關係においても我々は注意して進まなければならぬ。しかし可能性はこれを以て全く失はれたと

いふのではない。新しい方面から正しい方法を以て一歩づゝ證明してゆかうとする試みはやはり行はるべきであらうし、印歐語とフイン系言語との間にも行はれてゐる(例へば最近では B. Collinder, Indo-uralisches Sprachgut. Uppsala. 1934)。しかし印歐語とフインウゴル語との關係を立證することは容易に實現するとは思はれない如く、日南關係が同系論にまで發展することはそれにも増して困難であらうと思ふ。

三 朝鮮語との關係について

日本語と朝鮮語との系統的關係は、南方語との關係問題に比べて、研究の歴史も古く且つ一般に盛であり、また雙方とも相當に古い文獻を有し、嚴密に云へば局部的ではあらうけれども、兎に角今日以前の雙方の言語狀態を窺ひ得られるだけ、南方關係におけるよりも遙かに確實な從つて論證力の高い資料を蓄積して來てゐるのみならず、一般に同系か否かの問題の考察に際して遙かに積極的な理由が前者の說に向つて動くやうにも思はれるのである。二つの間の一致には稍嚴重に見ても單なる偶然の一致「自然のたはむれ」や單なる貸借關係以上のものがあると考へられる。しかし今までのところ一般的に見て、さう考へられる、さう見透しがつけられるといふだけであつて、同系論はいまだ確實廣汎な證明を受けたわけではないが、朝鮮語について歴史的に方言的に常に精緻な研究を行つて居られる小倉博士においても次第にさうした見透しが具體的に大きく確になつてゆくもののやうである。

日本語と朝鮮語の對照は我國では早くから試みられてゐるが、大抵は單に語彙それも多くは單に名詞だけについて對比せられただけの事であつて、別に考察に一貫した原理があつたわけでもなく、またその結果について明らかな見

透しを持つてゐたものではなかつた。その文法を稍〻詳しく論じ、言語の根本關係に觸れて來たのは明治になつてからのアストン W. G. Aston の「日韓兩語比較研究」（"Comparative study of the Japanese and the Corean languages." Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. New Series. XI. 1879 要領は松本氏前掲書一一頁から一三頁に載つてゐる）と、金澤庄三郎氏の「日韓語同系論」（東洋協會調査部學術報告第一册、一九〇九年、翌年英文のものと合册で刊行）の二つがはじめであつて、また重なるものである。何れも結論として（金澤氏の如きはむしろ前提として）日韓語の同系を認めんとしてゐられるのであるが、白鳥庫吉氏は金澤氏に反對してその無關係なるべきを論ぜられた。これに對する金澤氏の應答は遂になかつたが、金澤博士の説が行き過ぎならば、白鳥博士にも云ひ過ぎがあつて、私としては日鮮兩語の關係は今まで決して簡單に確證も出來なければ否定し去るのも謬であらうと思ふ。最近の傾向については最初に述べた如くである。

語法において二三相似のあるものを求めるならば、先づ複數を表はす助辭の、

朝鮮語　—tŏl

日本語　＝タチ

の間には何か積極的なものはないであらうか。語末の音韻については、「蜂」のハチ（古くはパチ）に對する pal があり、「夏」ナツ natu に對する nal があり、「充つる」に對する mil の關係もこの説明の傍證に出來さうである。

名詞代名詞の主格をあらはす助辭「ハ」は或は朝鮮語の Pa「物・者」で解けるのかも分らない。宛も支那語で何々者の者が助辭として働いてゐるやうに。もしこの關係が比較文典の成立によつて認められるならば、日本語の助辭の成

立も全部とは行かなくとも一部は明かにすることも出來るであらう。しかし私は一般に助辭の起原については別に考へるところがあるので、右の說明に期待をかけてゐるのではない。

むしろ同じやうな役目のものではあるが古い日本語に見られる主格の「イ」、例へば、

毛野のわくごイ、笛ふき上る

紀の關守イ、とどめこんかも

仲麿イ……

のイに朝鮮語の、

salam「人」に對する　salami「人が、人は」

mal「馬」に對する　mali「馬が、馬は」

のiに對する根本的關係はないであらうか。この現象は古くから學者の注意を惹いたものであつて、本來的關係によるとする人と反對に日本語には外來のものであるとする人とがあつて當時は容易に決しないやうであつたが、元より確定的な言を弄し得べき事柄ではない(詳しくは山田孝雄氏の奈良朝文法史を見られたし)。しかし、日本の文獻にあらはれるあらはれ方から見て年と共に次第に減つていつた傾向が窺はれ、また特殊な讀み癖ある文書に多く殘ることはそれが更に古い時代においては有力であつたものが、當時次第に使用の外に逸し去らんとする狀勢の下にあつたことを示すものであらうと思はれる。これから見ればイについては容易に外來要素と認められない理由が出來るのではあるけれども、一面奈良から平安のはじめにかけての三韓人の歸化若しくは移住して來たものが思ひの外に多く、而

もそれが近畿を中心として全國に廣まり、或地點においては却て外來の民族の方が多かつたかと思はれることもあつたのを見れば、當然國語に及ぼした彼らの言語の影響の小さからざるものであつたことも推察を許されるであらうし、從つてイについての外來論にも一應の理由はあるやうである。けれども古く上るほどその使用が盛であつた事がたとへ僅かにせよ窺はれることと、文法要素は一般に簡單に輸入採用せられ難いものであること、またかかる外來の文法が書紀の歌や宣命の如き最も日本的な國書や萬葉の如き歌謠にまであらはれ得ようとは考へられない。イはやはり純粹に本來の日本語要素なのであらう。本來的であればあるだけ朝鮮語との一致は重大である。私はこのイは日鮮語の同系を論ずる人には最も重要なポイントの一つだと思つてゐる。

代名詞の一人稱複數(我々)については朝鮮語は uri といひ又 uri-tŏl とも云つてゐる。-tŏl は右にも觸れた如く複數の助辭であるが、これがついてもよければつかなくてもよいと云ふことは、uri を單數とも見ればまた複數とも見るといふ事である。とすれば常に單數に取扱はれてゐる日本語のオレに對する意味と形の上の近似は否定することが出來ないのではないか。若しその間に本來の關係があるとすれば、オレも元來複數に用ゐられ得たものであつたかの疑問も湧くわけである。さうしてその場合、オ=レのレに複數の印(ラ)に當るものを認めるとすれば、オレの分析も或は可能となり、オは同意味の他の古語に引き寄せられる可能性も出來、一方朝鮮語の uri がそのまゝ複數形としても用ゐられる理由もつくであらう。オレも古い單語であつて、紀記に意例(オレ)、意禮(オレ)、註に爾此云飫例(オレ)と出てゐる。第二人稱にも使つたのは今日のワレと同じ事であらうなどと種々廣く解決の想像を逞ふすることが出來る。これらは單なる私の想像にすぎないけれども、兎に角二つの代名詞の間に語形の近似と延いて文法上の數の現象の相似が認めら

れるならば、これも兩言語を系統論的に研究する際の一つの楔となるであらう。

二人稱複數 nö も日本語との歩み寄りの可能性がある。朝鮮語 nö に對する日本語のナ(汝)。これも數に關しては異なるけれども、それだけの故に關係性を全然否定することも愼まなければならない。

また否定をあらはす朝鮮語の an(i)——例へば mökkedso「喫煙する」——に對して ani mökkedso「喫煙しません」——は常に動詞の前に立つが、この事は例へば勿來(ナコソ)關の勿來の如き禁止形においては日本語にも古く見られた順序であつた(朝鮮語でも禁止の場合やはり今も前に別の否定副詞を置く)。從つて順序から云つても別に日本語に奇異なものではないのであるが、この ani が日本語のアニ(豈)、イナ(否)と關係がありとするならばそれも全然否定する事は出來ない。

このやうに幾らかの可能性を殘してゐるものばかりではない。中には一見如何にも有望でありながら、少しく仔細に考へれば非常に都合の惡いものがないでもない。日本語の動詞について過去をあらはす＝タリと朝鮮語の ＝töra は一見よく似てゐるが、日本語のタリは萬葉にも而有で寫されてゐることがあるやうに、テアリから出てゐる。朝鮮語-töra にかくの如きことが立證せられない限り二つを容易に引き當てることが出來ない。同じく日本語ナリも朝鮮語の -nira に關係對應する形を見出す如くであるが、ナリも萬葉に爾有であらはされてもゐるやうにニアリから出てゐる。-nira に同樣の出自が立證せられない限りこれらの關係性を論ずることは出來ない。

この外搜せばかくの如き文法上の相似のものはなほ見出すことが出來る。何れにしてもかかる現象は今までの考察の結果では決して數多いものではない。中には考察を進めて却つて破棄せなければならないものもあらう。しかも右

にも見たやうに、特別のものを除いては相似と云つてもその程度は淺いものである。相似を對應にし一致にするにはまだまだ資料の整備と方法の精緻を期さなければならぬ。また我々は已むを得ず普通相似形を求めてゆくがこの事それ自體が已に非常な危險を敢てしてゐる事も忘れてはならない。相似形が語史を遡るほど却て離隔し、一見共通點のないやうな語形文法形が却つて語史的に近づいて遂に第三語において一致することは他の言語の研究によつて常に敎へられてゐるところである。尤もこれは變化の激しい言語と極東の多くの言語のやうに比較的さうでない言語におけるとではおのづからその程度に相違があるには違ひない。しかし我々が確かな原理の指導の下に、單なる相似形と根本的關係形とを區別する時が來なければ、日本語と朝鮮語の比較は單に對照つき合せに止まり眞の比較にはなり得ないのである。今のところ我々は已む得ない。かうした場合普通に人々が試みまた試みなければならない第一歩はやはり語彙のつき合せである、便宜上比較と云つてもよいであらう。

語彙におけるこの種類の試みは古くから行はれてゐる（白石の東雅の如きは時は古くとも流石優れた人のものと云はなければならない）。しかも少くも日本語と朝鮮語に關する限り、この種の研究には相當の價値があるのを否むことが出來ない。雙方の古い文獻にあらはれる單語の比較はなほさらである。例へば日本書紀の一部に採錄された古い朝鮮語に「上(ウヘ)」のことをオコシといふなどは「起ス」との關係も思ひ出されて學問的の興趣も深く、孫穆の鷄林類事に醬曰「密祖(ミショ)」とある「ミショ」は、直に我々の味噌を思ひ起させる（しかし「味噌」は或は朝鮮からの輸入であるかも分らない、音韻的に云つてもこの間の說明は當時の發音癖からして困難ではないから）。たとへ日本語に直接引き當てる事が出來なくとも、古い文獻にあらはれる數詞、例へば平安期の二中曆の譯言に見える大體當時（十一世紀——十二世紀

のはじめ頃)の高麗語(及貴賀國語)の古い數詞は、全部がさうではないけれども、そのあるものは今日の朝鮮語數詞の古形を思はせて言語の歴史的方面を明かにする外に、數詞のシステムの比較考察に際する前進地點を與へてくれる點において、大きい價値がある。この譯言は誤寫も多いらしくこれから私は日本語との關係を特に引き出すことは出來なかつたが、曾て私は別に三國史記の地名にあらはれてゐる新羅語の數詞(殊に三・五・七・十)が日本語の數詞に類似してゐるのに注意した事があつた。この古い朝鮮語の數詞が、何故に日本語に偶合とは思はれない程の一致をしてゐるのか輕々には解き去ることは出來ないが、新羅語の如き古朝鮮語に却つて合致するものがあることは、注意しなければならない現象であると思はれる。

しかし文獻に上る古い語彙は極めて僅かである。勢ひ今まで試みられて來た比較は多くは現代語(殊に朝鮮語について)においてであるが、文獻に左證を見出し得るものも少くはない。

日(火)ヒ——朝鮮語 pŏl(火)

類事には孛とある。もとより pul, pol の音をあらはしたつもりであらう。日本語のヒル(晝)は必ず日・火に關係する單語であらうけれども、その語原は日本語の内部においては説明することが出來ない。もし朝鮮語のと關係がつくならば、次第に明らかにされてゆくであらう。

氷ミヅ——朝鮮語 mŏl 물

華夷譯語には閔二卽ち mun(mon)-l とある。勿論 mŏl のことであらう(前の「夏」參照)。

海ワタ——朝鮮語 pala, pata.

日本語のワタは「渡る」から來たといふ人もあるが、この說はギリシヤ語の海ポントスが梵語のパントハン「道」と共に「行く」なる意味を有する語根に關係し、舟の渡る道の意であるといふところに意味の上の支持は得られないことはないが、こればかりが唯一可能な說明では決してない。音韻的にも疑がある。華夷譯語には把剌パラとあり訓蒙字會にはパタ바다とある。

雲クモ――朝鮮語 kulöm 구름

類事には雲曰屈林とあつて구름は古い單語である。これに對して日本語のクモは中の -lu- 르が落ちた形だといふ人もある、簡單に贊否を表はすことは元より出來ない。その他よく昔から擧げられるものに星の pöl、鷄の talk などがある。talk は日本語トリにあてようとするのであるが、金澤氏は＝talk の -k は後からの附添であると云はれた。卽ち tal をトリに引き當てることになつて關係性が更に高められることになるのであるが、この -k は取り離されても、朝鮮語の小動物名に多い語尾の -k 又 ki(-gi) として說明出來ないこともない。日本語のウサギ、の末音節もこれに對して少くとも似てゐる。尤もこれも、カササギなどは(朝鮮語カチヤチヤク)外來の鳥として文獻にあらはれてゐるのであるから、輕々に斷定することは出來ない。

かうした相似性の誘導或は關係の可能性の豫想の下に比較或は對照せられた語彙要素の數は、この他にも數多い。金澤氏の論文の外、清水元太郎氏が大正七年四月の藝文誌上に發表された「天産物の日韓名稱比較」も相當の語數を拾つてゐる(但し擬聲語の似寄りなどは注意して扱はなければならぬ)。

しかし右の例において讀者も考へられたであらうやうに、その引當てには成程と肯はれるものもあれば、何として

も取り難く不滿に思はれる項もあらう。肯ふにせよ、捨てるにせよ、何れも定立せられた原理によつて行はれるのではないから、確信を以つて左右を決めることが出來ないに違ひない。しかも單なる偶合「自然のたはむれ」とは思はれない、必ず二つの言語の間には根本的の關係があるに相違ない——これが日本語と朝鮮語の關係性に關する今日の態度である。

日本語と朝鮮語は措辭法においては非常に似てゐる。しかしこの方面の一致は言語の系統を論ずる際にはあまり當にはならないものである。音韻組織の上では大きい差異がある。語法語彙の一致は多いと云ふことは出來ない。にもかゝはらず、根本關係の存在は如何にも疑ふことが出來ない。しかし組織的に立證することが出來ない。材料が少ない、分つてゐる言語史が短い（八世紀からの文獻といへばあまりに新しい）。一方幾らか新しい方法を編む必要もあるに相違ない。しかし言語研究も他の學問と同じく單に嚴密な方法に頼るばかりが進歩する道ではない。研究する個人のタクトと良識がなければ却つて大きい過誤を常に犯すものである。この二つの指導の下に右のやうな見透しを以て進むことが今後の我々の第一歩であらうと信ずる。この事は次の項について亦同じである。

四　ウラル・アルタイ語族との關係について

ウラル・アルタイ語族については、その存在を否定する人もある。ウラル語族、アルタイ語族といふものはそれぞれ存在するけれども、二つを合せたウラルアルタイ語族は存在しないといふのである。今私は日本語の系統を論ずるのが目的であるから、ここにはこの問題に立入つてゐる遑がない。ただ最近は資料も增え、見透しも明確になつて來

たためか、再びウラル・アルタイ語族なるものを設定する傾向が主潮となつて來てゐるのは注意すべきことである。この點については、最も最近の傾向を代表するものとして Sauvageot の「ウラル・アルタイ諸語の語彙研究」Recherches sur le vocabulaire des langues ouralo-altaïques. Paris. 1930. の序論に譲つて置きたい(尤も私自身全くこれに贊してゐるのではない、日本語・朝鮮語を知らないと見える著者はその構造について隨分大膽な概括論を試みて誤謬を犯してゐる)。私の問題は日本語は果してこの語族に根本關係ありや否や、ありとすれば如何なる關係性を有するかである。

日本語が果してウラル・アルタイ語族に歸屬するや否やについては昔から西洋にも日本にも議論が多い。我國においては金澤博士の如き熱心な肯定論者であるが、白鳥博士の如き頑强な否定論者もある。しかもその白鳥博士もはじめは熱心な肯定論者であつたのである。西洋においては肯定する人々は Klaproth, Siebold, Ewald, Boller, de Rosny, Hoffmann, T., Schott, Pott, Winkler, Grunzel, の如き東洋(語)學者であつて、最近では Prölle があり、Ramstedt の如きも、獨自の見を持しながら肯定して居り、匈牙利の學者は大體暫く疑を存するといふ態度であるやうに見受けられる。例へばかのシンニェイの如くであつて(Szinnyei József, Magyar Nyelvhasonlitás. Budapest. 1909.「マヂャール語比較文典」序說)、全然否定するか或は深い疑を挾んでゐたのはホイットニーの如き本來印歐語を主たる對象とする言語學者の一派であつた。一つには極東の言語を親しく知らなかつたからであらう。Sauvageot の如きも日本語をウラル・アルタイ語族の中に認めて居らない。のみならず、更に可能性の高い朝鮮語をさへ省いてゐるのである。大正三年から五年にわたつて東方學報に連載された白鳥博士の「朝鮮語と Ural-altai 語との比較研究」よ

り、少くとも朝鮮語を顧みなかつた點において劣るものと云はなければなるまい。尤も白鳥博士のこの語彙に關する大きい研究は批評すべき餘地があるにもせよ今も尙最も力ある論文である。

朝鮮語がウラル・アルタイ語族に屬することについては尙多數の論證すべき事項があるけれども、その可能は最近の小倉博士の精しい研究によつても依然たるものであるのみならず、母韻協和の如き現象も古い時代程明瞭にあらはれてゐることが統計的に明かにされるなど、その可能性は却て高まつて來たやうに思はれる。この朝鮮語に對する日本語の關係は前の項において述べた如くであるとすれば、讀者は既に私の考へる日本語とウラル・アルタイ語族との關係については凡そ想像してゐられる事と思ふ。

その關係について、私は今のところ斷言することは固より憚らなければならないけれども、一二比較を試みた結果には語彙において文法において所謂偶然の一致以上と思はれるものが若干ある(私はまだ音韻の比較は試みてゐないけれども大體トゥングース派に最も近いやうに思つてゐる)。

文法の現象については複數を造る際に短い單語ならば重ねて、例へば滿洲語 ba-ba(「場所」の複數)とする如き現象は南方語にも常に見られる現象で敢て奇とするには足らないけれども、兎に角これが日本語にも普通の行き方である事には一應の注意はすべきであらう。かういふことを全く知らない言語も世界には數多いのである。

また前項に擧げた日本語タチ、朝鮮語 tɕl の複數助辭に對しても、近い形がウラル・アルタイ語の中に見出される。

モルドヴィア語　-t

ヴオグール語　-t

オスティヤーク語　-tl

スゥリエン語　-yas (<(-vl-)ya?)

チェレミス語　-vlya

の如きウラル諸語におけるほか、トルコ諸語には -lar(-ler) があり、この數助辭(或は數添辭)は時に -tar(-ter) としてあらはれることもある。トルコ語の一つであつて一般に最も古形が多いとせられるヤクート語においても同樣である。またトゥングース語においては方言的に、

-sal　-hal　-ul　-il　-r

の如くにしてあらはれてゐる。sal は -tal からの出自として說明出來ないことはなく、-hal は勿論その一歩前は -sal であり、頭に子音を有しない爾餘の形は -hal によつて漸次說明することが出來る。これらの形はトゥングースの中でも所謂未開のトゥングースと云はれるもの、ゴリド語オロッコ語等の形である。

滿洲語にあつては、

-sa　-ta　-te　-ri

これらは t-l (t-r) によつて說明出來るであらう。蒙古語では -nar (ner), -ut,-od (-öd), -s ブリヤート語 -nar, -ut ——これらは一見 t-l, (t-r), -lar (-ler)と無關係なやうであるが、トルコ語の -lar (-ler) は -tar (-ter) としてあらはれるほか -nar (-ner) としてもあらはれる事があるのを見れば全然關係性を否定するのも考へものである。ut, od (öd) は末尾の流音の脫落としても考へられる。

かうしてこれらの形から、原形として -tal (-tol) に類するもの丶フィノウゴル言語學の遣方を採すれば *-tol(*-tal) とでも書き寫すべき形が出て來るのではあるまいか。もとより材料も方法も具備してゐないこの方面の言語研究においては印歐語に於けるが如き確實な推定が出來ないのは已むを得ない。しかし大體の想像として右の如きものを認めるならば、朝鮮語の -tol それから前に述べた如く日本語のタチも關係せしめて考へられないこともないやうである（チと l(r) の關係としては蜂（ハチ）— パル、口（クチ）— クル「空、洞」、星（ホシ）— pol 參考ゴリド語 pöule）。決して斷定出來る關係ではないけれどもまた偶合とも決め去ることは出來ない。日本語系統論設定の重要な足掛りの一つとして一先づ利用すべき價値あることは云ふまでもない。

その他一つ一つ廣く例を擧げて細論することは省くけれども、名詞の格助辭についても、主格の「ハ」即ち古形「パ」は滿洲蒙古語の助辭 be, bör と對照することも出來るであらうし、「イ」もフイン語の i の如きと近い對照は出來るやうである（このイは始原からイであつたとは斷定しない、ギであつたかもわからないのである）。對格の「ヲ」即ち wo については、ラツプランド語 b、ヴォグール語 me. チェレミツス語 m、フィンランド語 n（∧m）、即ちすべて b m の形に歸し得るものに對比することが出來るやうであり、一方トゥングースに多く -va(-vä), -ma(-me) としてあらはれてゐることから推して、日本語の「ヲ」は -bo > -vo? > wo の經路を經たものではなかつたか と思はれる。しかしハにせよヲにせよ、何れも格助辭がなくして用ゐられることの多い格につく助辭である。私は本來それらは助辭でなく、或は文中におけるその單語の地位を强意する所謂 affectivité の副詞ではなかつたかとも思つてゐるから、右の關係を確言するわけではない。本論のやうな場合には常に四方に疑を存しながら進まなければならない。屬格の「ノ」

についても大陸にはnを含む助辭或は添辭を見出し得ることが多く、その間の關係性は大體考へられない事はない。しかし與格においては大陸とは大きい離隔が生ずる。日本語は「ニ」であるが大陸の諸言語は多くt若しくはdを含む助辭である。思ふに日本語においてノとニは元來區別なく用ゐられてゐたのが、後、所屬を表すのに專ら「ノ」があたる事になり所在關係を表すのに主として「ニ」が用ゐられるやうに分化し固定したのでもあらう。所屬關係と所在關係が決して相互に交渉のないものでない事は西洋の言語にも曾ては與格を所屬に用ゐてゐたものがあつたことによつても知ることが出來る(今日でも特定の場合にはそれが盛に用ゐられてゐる)。滿洲語の -de は日本語の「デ」によく似てゐるけれどもデはその前階段としてニテを豫想してゐるから、直に引きあてることは出來ない。西洋の學者にはこの輕擧を敢てするものが多い。

動詞の「變化」或は「活用」に關しては、行キ＝キの＝キの如きは例へば滿洲語の gene-xe (x は一般に k から)に對比して一應考察する必要がある。また「降レリ」は「降リ＝アリ」から出てゐるものであるが、こゝに r の音を用ゐることは例へば滿洲語の gene-re 「行きたる」の -re に關係づけて說明したいものである。しかし日本語の右の要素の出自は「アリ」からであつて極めて明瞭であるに拘らず、滿洲語のそれは全く由來が分つてゐない。卽ち比較に危險がある。その他使役相や所相形、形容詞の變化についても述ぶべきものがあるけれども、系統論に對する結論としては大體右と同樣のものであるから、こゝには省略して置きたい。

次に語彙における日本語とウラル・アルタイ語との關係性については昔から東西の學者によつて最も多く取扱はれてゐるのでこゝにはそれらを別に繰り返さうとは思はない。たゞ、代名詞においては比較的相似が多いが、單純な手

續で立證され得る程の透明な一致ではない。數詞においては日本語はウラル・アルタイ語と極めて疎遠である。「五」については、

フィンランド語	wite, viisi
ラップ語	wita
スゥリエン語	wit
モルドヴア語	wita
チェレミッス語	wits, wiz
オスティヤーク語	wet
ヴォグール語	ät āt(前出 Szinngei, Magyar Nyelvhasonlítás. P. 28)
マヂャール(匂牙利)語	öt
エストニア語	viis

の如くフィンウゴール諸語に日本語の itu-tu を思はせるものもあるけれども、これだけで遽に根本關係を論することは出來ない。殊に「六」

サモエード語（ユーラク方言）	mat
同　　　　（タウギー方言）	metu
同　　　　（エニセイ方言）	motu

同　　　　（オスティヤーク・サモエード方言）　muktut

同　　　　（カマッシニ方言）　muktud

であるから一見日本語の mutu と深い關係があるやうである。しかし最後の二つの例が示すやうに、元々これらサモエード語の形にはkが介入して居つたものとすれば、日本語に引き當てる事は愼まなければならない。前の「五」についても詳しく調べれば如何なる事情が內在するか分らない。語彙の對比から簡單に結論を抽き出すことは出來ないものである。――フィンランド語・マヂャール語・エストニア語、その他の狹義のフィン・ウゴル語に屬するものは、六についてそれぞれ han, kunsi, kuus…の如き全く別の數詞を持つてゐる。これがサモエード諸語をして狹義のフィンウゴール語から別の一團として取扱はれしめる所以の一つでもあるが（フリードリヒ・ミュラーの如きは同格に對立せしめてゐる）、一體にウラル・アルタイ語族の數詞體系には異動が非常に甚だしい。狹い區域にしか共通要素のない事が多い。借用のためかとも思はれるが、古朝鮮においても新羅語の數詞と貴賀國語・高麗語の數詞の不一致は奇妙な現象である。將來の問題が殘されてゐるのではあるまいか。

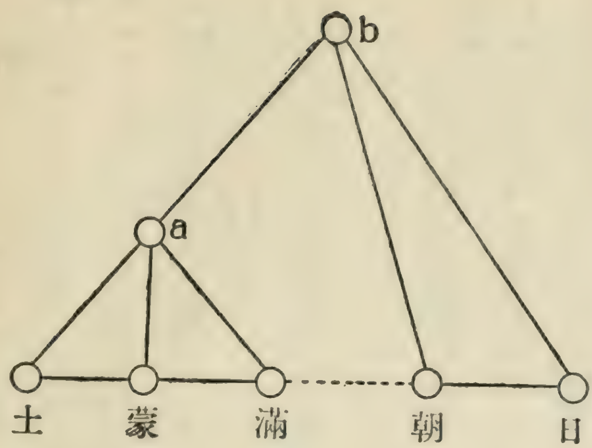
日本語とウラル・アルタイ語の語彙の對比を最も數多くあげてゐるのはやはりグルンツェルであらう（J. Grunzel, Entwurf einer vergleichenden Grammatik der altaischen Sprachen nebst einem vergleichenden Wörterbuch. 1895.）。隨分如何はしい對比もあるが、半分位は可能性があらうと思はれる。

これら先人のあまり觸れなかつた語彙の對比としては「大」即ち opo と滿洲語の amba（多少）などには可能性はあるまいか。amba は阿保機の阿保であつて「大」の意、m は本來ないものである。

水のムレン、汁のシロ（オロッコ語）、霜のシマ（Sima）、蓆(ムシロ)のモシリ、旋風(ツムジ)の tömji「あらし」など。その他動物の名、祭祀の語についても同様に考へてゐるものは少々ある。要するに語彙についても無稽な偶合とは思はれないものがある。

五　結　語

極めて簡單にではあつたが以上述べて來た事によつて、國語の根本關係はおのづから南方よりはむしろ北方に傾いてゐるやうに思はれる。事實、今日國語が朝鮮と共にウラル・アルタイ語に歸屬すべきことについては、見透しとしては誰も疑ふものはないであらう。もしウラル・アルタイ語族に入るとすればそれは如何なる親族性にあるか、ラムステッド博士は曾て日本語のアルタイ語（土耳古・蒙古・滿洲語）に對する上のやうな關係を說かれたことがあつた（A comparison of Altaic languages with Japanese. Transactions of Asiatic Society of Japan. II series. Vol. I. 1924）。確かに日本語朝鮮語は土蒙滿語に對しては否定し得ない關係はありながら、あまりに離れてゐる點も多い。直に土蒙滿語に關係するものでなく、或は上の圖の如く更にその上の共通原語を通じて遠く緣を引くのであるかも分らない。また日鮮兩語も近いやうに見えながら詳しく見れば決してさうではないのは右に見た通りである。



やはり圖のやうに最も遠いところで一致してゐるのかも分らない。そしてフィノ・ウゴール語はbに一致するのか、或は自らb′を造成して改めてaに一致するのか、或はaと共に更に古い別個の共通原語に遡るのか、遽に斷言は出來ない。兎に角日本語は早く共通原語から分出して南方語とも接觸し若干の影響を受けて來たものであらう。ホフマンの日本文典第一頁に「日本語は一般的性格から云へば滿蒙語と同族であるが、その發達は獨特のものである。後世支那語の影響があつたに拘らずよくそのオリジナリティを維持してゐる」。偉大なる日本語學者の見は今日においても遉がに穩健なものと云はなければならないが、このオリジナリティが問題なのである。

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十一日發行

國語科學講座
（第十二回配本）

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院